# デイヴィドソン 『行為と出来事』


| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 柴田, 正良<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/43385 |

## デイヴィドソン Donald Davidson (1917- )
## 『行為と出来事』＊1980年刊

本書はデイヴィドソン哲学の2つの柱，すなわち意味論と行為論のうち後者に関する主要論文を集めたものであり，行為論の一方を代表する因果説の現代の古典となっている。

本書においてデイヴィドソンがなしたことは，大まかに言って3つある。第1は，行為の理由と原因を異なるカテゴリーに分類する当時有力であったウィトゲンシュタイン的な反因果説に抗して，「行為理由は行為の原因である」とする行為の因果説を復活させたことである。行為説明は原因に訴える法則的説明ではありえないとする批判に対処するために，彼は，行為と行為記述を峻別し，それによって行為説明に非法則的な因果的説明という独特の身分を与えた。第2は，「アリスはそっと猫を撫でた」と「アリスは猫を撫でた」といった行為文相互の含意関係が一階の述語論理で保存されるような，行為文の論理形式を与えたことである。これは，自然言語の意味論をタルスキ・タイプの真理理論で実現するために意味の合成性を確保せねばならないからだが，このために彼は，普通の行為文や出来事文を出来事という存在者に対する量化文だと分析する。たとえば後者の論理形式は，(∃e)（撫でた（アリス，猫，e））となる。それゆえ第3に，彼は，心的出来事と物的出来事を含めた出来事一般の存在論に関する見通しを，先の2つの企てと斉合的な仕方で与えねばならなかった。それを果たすのは，心的出来事と物的出来事は同一であるがその両者を繋ぐ厳密な心理物理的法則は存在しない，とする非法則論的一元論（anomalous monism）の主張であり，それは心身問題に関する心脳のトークン同一説を含意する。

訳者（柴田正良）要約

［書誌データ］ Donald Davidson, *Essays on Actions and Events*, Oxford University Press, 1980（『行為と出来事』服部裕幸・柴田正良訳，勁草書房，1990）.